

研究ノート：VOLLEYBALL TERMINOLOGY あれこれ

古沢 久雄*

1. はじめに

この世にバレーボールが誕生して百年を超え、オリンピックの正式種目となって35年も経過した。我が国では、伝統の9人制の愛好者を多く温存しながら、国際式（とは最近呼ばなくなった）6人制が学校体育で全国津々浦々に普及した。そして、4人制ソフトバレーや2人制ビーチバレーの大会も盛んになりつつある。

選手達が口にし、指導者が使う言葉も未整理のまま今日に至り、この辺である程度バレーボール用語の交通整理をしておく必要があると感ずる。スポーツジャーナリストへの影響も考え、研究者相互が共通のtermで語り、その定義について責任を持つようにするべきだ。日本のサッカー界は、旧来の用語の見直しをCoaches Associationが中心になって積極的に取り組み、戦術概念を国際水準に引き上げる試みを始めた。

2. 思いきった言い替えを

昨今では「サーブカットがセッターに返らないので、……」とか、「A選手はカットが良いから」のように使う場合が多い。卓球のカット打法や美容院でのカットと同等にあまりにも堂々と皆が使うので、誰も誤りを指摘できなくなった。レシーブ側チームが、相手サーブ権を「断ち切って」サイドアウトを取ろう、という意味合いで使ってきた「カット」が、いつの間にか技術用語と混同してしまった好例だ。

また、9人制以外のサーブ一本制の試合での「大事な時にサーブをダブルな!」や、女子バレー界の「ナイスキャッチ」は微笑ましい誤用だ。ベテランが昔の感覚でついつい使ってしまうのと、野球の華麗なフィールディングへの賞賛と似た語感での気軽なコールから来ている。

これらは「カット」や「キャッチ」をレシーブに、「ダブル」をミスまたはフォルトに勇気を出して置き換えれば済むことだ。はじめは気軽に使ってみただけなのだろうが、カタカナ言葉に無批判かつ迎合的なわが国では、今後一層の警戒を要するケースだ。

また、使用頻度の高いものとして「ブロックフォロー」がある。これは、味方スパイクが相手ブロックに止められることを想定し、他のプレイヤーがスパイカーの周囲にシ

フトすることを表現したと想像する。が、義務感でブロックされたボールをフォローしていたのではボールはつながらない。正しくは、相手ブロックの対応やスパイクの打ち方を指示する等積極的攻撃援護のグループ戦術だ。リバウンドボールを再攻撃につなげる起点ともなる。したがって、スパイクカバーと置き換えなければならない。

3. 早急に改善を要する言葉

頻繁に使われているが意味不明なものもある。「レシーブが乱れたら二段トスでエースに打たせろ」。二段の「二」はどんな意味を持つのか？二段攻撃は戦術用語として成立するが、この例はコート後方からの緊急避難的トスを指す。欧米のlink setやdeep set、中国の調整トスに相当する用語を確定する必要がある。

審判用語の「IF」（公式記録用紙）や「目玉」（ラインナップチケット）も、適切なことばへの転換を期待したい。「メンバーチェンジ」も、サブステイチューションが無理なら選手交代とすんなり使いたい。

4. 整理したほうがよい用語

(1) サーブ

サーブの種類を分類するときに、変化球サーブ、ドライブサーブ、アンダーハンドサーブ、ジャンピングサーブ等の呼び名を耳にすることが多い。前の二つは打たれたサーブがどんな軌跡を描くか、また「球質」からの命名と考えられる。そして、後のふたつはどのようにしてサーブを打つか、という「打法」を表わす名称だ。フローターサーブ、天井サーブ、逆回転サーブ等も前者に属するが、一度定着してしまったものは一人歩きしてしまう好例だ。

本来ならば、打法と球質とを組合せる等の慎重な整理が必要だろう。どこを狙ってどんなサーブを打ってやろう、という戦術的必然性から球質が選択され、それに見合った打法が技術的に開発された。サーブを打つ場所と落下点の関係なども加わると、分析はより複雑を究めるが、技術指導と戦術コーチングの際に確認作業が大切だ。サーバー自身がネットに背を向けて、「逆回転」と考えて打つサーブは、相手レシーバーにとっては「順回転」なのだ。

*鹿屋体育大学

(2) スパイク

バレーボールの華と呼ばれるスパイクでは、サーブと共に「コース」打ちが多用される。打点と相手コートの落下点を結ぶ線が「クロス」か「ストレート」かで所謂打ち分ける技術が、名スパイカーの条件とも言われる。ブロッカーはその「コース」をいち早く読んで、対応することが求められる。

一方、スパイカーの個人戦術としては、相手ブロッカーの意図を察知し、その間隙や周辺を打抜くことで攻撃を完遂させる。どこが相手の弱点であり、突破口かの見極めが問われるのであって、単純な二者択一の「コース」打ち分けでは対処しきれない。常に、相手との攻防という相対的な戦術関係で捕えたトレーニングが要求される。

ブロックハンドの出方を予測し、その上下左右あるいは中央を突破するか、かわすか、いなすかの駆け引きだ。ブロックアウトやフェイント等のコントロールスパイクは基礎技術に位置付き、高さやパワーの「全力」スパイクは体力トレーニングの効果と相まった応用技術と考えるのが妥当だ。

ここまでは高いトスからの「オープン」スパイク向きの戦術的打法を中心に述べた。クイックスパイクやバックアタック等に攻撃バリエーションを広げれば、対ブロック攻略法としての新しい用語概念を早急に確立せねばならない。

(3) 戦術

チームの選手構成として、2種類のツーセッターシステムがあることをバレーボールの授業では教える必要がある。すなわち6-2システムと4-2システムの二つだ。6(スパイカーの人数)-2(セッターの人数)システムは後衛セッターが「トス」して前衛スパイカー3人で攻撃でき、4-2システムは前衛セッターの方が常時「トス」するため、前衛スパイカーは2人だけという区別が、生徒には分かりづらい。5-1(ワンセッター)システムのセッタースペシャリスト型や、6-6システムの全員オールラウンド型も体育の授業レベルでは有効なシステムだ。

また、多彩な攻撃フォーメーションに対応して、守備戦術が次々に開発された。ブロックシステムに関して、リードやコミットの普及過程でいくつかの混乱が生じている。Read and React Systemを反応ブロック(ソフトタッチブロック)システムと位置付けて、ワンタッチからのカウンターアタックに持ち込む。張り付きブロック(Commit

System)システムで速攻を封じる。これに積み重ねブロックシステム(Stack-Switch System)を加えて、頻度の高いコンビネーション攻撃に対抗(マッチアップ)する。

攻撃的サーブに対しては、2~3人のサーブレシーブスペシャリストが特定のエリアをカバーする目的でシフトすることが多い。また、レシーブ後の攻撃をも考慮した効率的なフォーメーションを組む。

(4) ポジション

インカレの大会プログラムに登録選手のポジションを提出した際、某チームがアウトサイドヒッター、ミドルブロッカー、ユニバーサルプレイヤー等の名称を使用したら、学連委員から執拗な訂正を迫られた。「レフト」「センター」「スーパーエース」以外はファンに理解できないというのが、その理由だった。

9人制バレーボールの固定ポジションならいざ知らず、チーム内の役割構成を示すポジション名はグローバルスタンダードが望ましい。時期尚早ととられたようだ。それにしても、セッター対角にはどこのチームにも「スーパーエース」が存在するのだろうか。

「トサー」からセッターへの移行がなんの抵抗もなく出来、ローテーション制に慣れ親しんだ筈なのに、機能より位置にこだわる発想は再考を要する。むしろ、ポジション1=BR, ポジション2=FR, ポジション3=FC, ポジション4=FL, ポジション5=BL, ポジション6=BCの呼称は、スターティングラインナップの選手配置や各種フォーメーションの確認に欠かせない。前衛、後衛の呼び方は貴重だ。

5. おわりに

指導者の気遣い次第で、いくつかの不注意は簡単に過去の遺物にできるし、大袈裟に言えば現在蔓延している技術万能主義を克服するきっかけにもなる。こういった地道なプロセスを経ながら、総合戦術を視野に入れた新しいバレーボールのコンセプト作りへの第一歩としたい。

また、今回のルール改正によって、バレーボールの本質も幾分かの変化をとげる可能性がある。実践的コーチングでは一日の長を自認する我が国が、理論面でもリーダーシップを発揮する良い機会だ。国際大会の度に聞かれる、悲壮感に満ちた「ニッポン!チャツチャツチャ」の声援も、そろそろバージョンアップを期待している。